

令和 4 年度 大学活性化経費 事業成果報告書

事業区分 (2) グローバル化に対応した人材育成に関する事業

申請組織 国際交流センター

申請組織長 役職名 国際交流センター長 氏名 笠原 正秀

統括責任者 役職名 学生課長 氏名 高木 康男

課題名 国際交流の維持・発展

	役 割	氏 名	所属・役職名	役割分担
事業組織	統括責任	高木 康男	学生課長	国際交流の推進の立案と運営
		笠原 正秀	国際交流センター長	国際交流の推進の立案と実行
		季 増民	国際交流委員	国際交流の推進の立案と実行
		伊藤 信博	国際交流委員	国際交流の推進の立案と実行
		ステイーブン・クアシャ	国際交流委員	国際交流の推進の立案と実行
		加治 瞳美	学生課国際交流担当	国際交流の推進の立案と運営

1. 事業開始の背景・経緯や目的等 (200 字～300 字程度で記述)

国際化ビジョンが制定されてから、協定先の新規拡充に努めてきており現在 9 か国 11 大学と交換留学、派遣留学の協定を締結しているが、その一方で既存の協定校との間で、担当者が異動したことで関係性がリセットされ、プログラムの存続が困難になるようなトラブルも生じている。学生交換協定または派遣協定を締結している大学を訪問し、留学プログラムについて協議し、関係の強化を図る必要が生じている。また、学部改組により新設する外国語学部では全員留学を予定しているため、新規協定校の開拓が急務である。

コロナ禍における海外渡航については外務省の感染症危険レベルが緩和されてきたことにより、本年度より渡航可能な国から順次留学プログラムを再開する。JASSO の補助金申請などにおいては、参加学生の留学後の学生の意識の変化をアンケート・自己評価ではなく、客観的に効果測定することを求められていることもあり、交換留学、派遣留学の学生からこれを実施する。

2. 事業方法（特色・独創性）等 (300 字程度で記述)

- (1) 嶺東科技大学（台湾）日本語表現方法についての実習を行う学生の派遣及びそれに相当する内容で学生を本学で受け入れる旨の協定締結に向けて交渉を進める。また、交換留学の協定締結も締結したい。
- (2) 亜洲大学（台湾）・上海師範大学（中国）協定先でもある亜洲大学、上海師範大学を訪問先として仮に設定しているが、その他、協定校でアクシデント等が発生した際には、当該予算により渡航し、早期解決を図りたい。
- (3) タスマニア大学（オーストラリア）タスマニア大学で実施される留学説明会に参加して本学との交換留学について PR する。
- (4) 留学における学生の意識の変化を客観的に測定にするツールとして、国内の大学でよく利用されている BEVI を利用して、留学前と留学後の意識の変化を調査し、留学の効果測定を行う。

3. 事業の成果（600字～800字程度で記述）

(1) 学生交換協定について、以下のプロセスを経て嶺東科技大学との協定を締結した。

同校の国際交流担当者との協議を継続し、R4年12月の大学協議会、理事会で協定締結の承認を得た。R5年1月に同行の担当者が本学を訪問し、プログラムの詳細について協議を行い、協定書の調印式を実施した。来日中であった同校の学生も本学を訪問し、本学の学生との交流会を開催した。R5年3月には国際交流センター長と国際交流委員1名が同校を訪問し、教育環境や学生寮の視察、及び大学周辺地域の調査を行う予定である。

(2)(1)での台湾訪問に合わせ、亜洲大学を訪問する。

留学プログラムについて協議すること、及び関係の強化を図ることを目的とする。

(3) タスマニア大学で実施される留学説明会に参加して本学との交換留学についてPRする。

コロナ禍においては本学へ留学する学生がいなかったこともあってか、受入を再開してからでも本学へ留学を希望する学生がいなかった。交換留学では派遣留学生と受入留学生の人数のバランスをとる必要があるため、タスマニア大学で開催される留学説明会に参加し、日本留学を希望する学生に本学への留学を希望してもらうためのPRを行う。

(4) BEVIを利用して留学生の意識調査を行い、留学の効果測定を行う。

BEVIは無料の「お試し期間」があるため、まずこれを利用して、本学が目的としていることにBEVIが有効か判断する。

4. キーワード（本事業のキーワードを1つ以上8つ以内で記載）

①交換留学	②派遣留学	③嶺東科技大学	④亜洲大学
⑤タスマニア大学	⑥BEVI	⑦	⑧

5. 事業の達成状況及び今後の課題（事業の達成状況を踏まえて、課題、反省点、及び今後の取組みを具体的に記載すること。）

- ・ R5年度中に遼東科技大学との交換留学を実施する。
- ・ R5年度前期にはタスマニア大学からの交換留学生の受入はなかった。タスマニア大学との連携を継続して、後期からの受入を目指す。
- ・ BEVIの利用は実現できなかったため、R5年度は利用できるように準備する。